

カンボジア ペタンクを楽しむ人々

初鹿野 直美

日本ではあまりみかけることのないペタンクは、フランス発祥のスポーツで、陸上版カーリングともいわれる。小さな木製のボール（目標球、ビュット）を投げて目標とするポイント（目標球、そのポイントをめがけて野球ボールくらいの大きさの鉄の球を投げ、目標ポイントに対する近さを競う。遠くからみると、日本のゲートボールのような雰囲気）の漂う、のどかなゲームでもある。

フランスの植民地だったインドシナ地域ではなじみの深いスポーツで、カンボジアのプノンペンでは、大学のキャンパスの片隅にペタンク場があった。また、ラオスでも、地方都市の民家の庭先で若者たちがだらだらとビールを飲みながらペタンクに興じていた場に居合わせたことがある。目標球を投げて定めたポイントが競技をするのに重要な「場」を規定するため、しっかりと整備されたコートがなくても、鉄球のセットさえあれば、それなりに気軽に楽しめるゲームである。激しく身体を動かす必要もなく、熱帯地域の国々でも問題なく楽しめる。この地域の環境にも適したスポーツなのかもしれない。

筆者がカンボジアに住んでいた二〇〇七年、東南アジア競技大会で男子のシングルスおよびダブルスの部門でカンボジアが金メダルをとったこともあり、友人のカンボジア人女性が「前は負けただけ、今回は勝ったわ！」と力説していたこと

を覚えている。当時、「ペタンク」の名前すら聞いたことなかった私は、目を白黒させながら彼女の話に耳を傾けたものである。

カンボジアの首都プノンペンには、一九六四年につくられた「オリンピック・スタジアム」という名前の施設は存在するが、オリンピックを開催したことはなく、自国選手が活躍することのないスポーツの国際大会への関心は低い。スポーツでカンボジアの人々が熱狂するものといえば、賭けの対象にもなっているヨーロッパのサッカーやムエタイに似たクメール・ボクシングくらいなのではないだろうか。そのような環境にあって、ペタンクは東南アジア競技大会という国際大会で数少ない金メダル獲得の可能性のある競技として、一部の人たちのあいだで楽しまれてきた。国全体が熱狂するまでではないが、「都会の人なら結果くらいは知っている」という数少ないスポーツイベントのひとつであったことは事実である。なお、東南アジア競技大会の過去の結果をみると、ラオス、ベトナムのほか、タイ、マレーシアもメダル常連国であり、カンボジアの「ライバル国」とされてきた。

二〇一四年一〇月、韓国で開催されたアジア大会のテコンドー女子七三キロ以下級で、ソーン・シウマイ選手（一九歳）がカンボジア史上初の金メダルを獲得したことは、人々の大きな関心をよ

んだ。帰国したシウマイ選手は、国民的賞賛を浴び、政府は約二万ドルの報奨金を与えた。カンボジアの学校教育での体育の比重は低く、地方出身の若い友人（二〇歳代後半、女性）は「中学・高校時代に体育なんてやったこと記憶がないわ」というが、プノンペン出身のもう少し若い世代では、子どもたちから練習環境に恵まれた世代も生まれつつある。テニスやゴルフ、マラソンでも、国際大会に出場する自国の選手が出つつある現在、ペタンク以外のスポーツで、カンボジアの人々が国際大会に関心をもつ日、さらには熱狂する日がやってきたのかもしれない。夕方のプノンペンの街角では、次のシウマイ選手を目指して練習に励む子どもたちの姿がみられる。

一方、健康志向の高まるなか、大人たちが気軽に楽しむスポーツとしても、バレーボールやバドミントン、サッカーに加え、ジョギングやエアロビで汗を流す人が増えてきている。のどかなペタンクがいつまで人々のささやかな関心をひきつけ続けることができるのか、その将来が気になるところである。

（はつかの なおみ/JETROバンコク事務所・アジア経済研究所）